

作／田口浩一郎

K T M R キッチンシアター 第二回公演

湘南サナトリウム

照明、完全にOFF。舞台中央に寝台。背景には怪しげな燭光が光っている。

そこに、色違いのステッキを持った二人の老人たちが入場してくる。三人、寝台の周囲に横たわる。顔は全員客席の方に向け、目を見開いている。一人の少女が上手袖より登場。寝台に腰を掛ける。

老人たち、呻き声を漏らす。すると、ややして舞台上に何本かサスペンション・ライトが射す。それをきっかけに老人たち、立ち上がる。

老人1 ふははは、ここで会ったが百年目じゃ！

老人2 ぬふふ、わざわざ返り討ちに遭いに来たか。

老人1 抜かせ！貴様を討つために諸国を経巡ったわ。いざ尋常に勝負！

老人2 ……よからう。

老人1・2、ステッキを構える。

老人1 秘剣、ツバメ返し！

老人2 速きこと風の如し！

老人1 一太刀目はかわせても、二太刀目はかわせぬわ！

老人2 速きこと風の如し！

老人3 殿中でござる！（老人1を羽交い締めにする）

老人1 何するか！あと一太刀！

老人2 速きこと風の如し！

老人達、デタラメなチャンバラを繰り広げる。少女、笑い始める。

老人達 ウ、ウケた！？

「」で看護婦が登場。看護婦の衣装、ちよつとパンクつーかボンデージっぽい。手には乗馬鞭。
老人たちを次々と打ちすえる。

看護婦 あんたたち！何やってるの！

老人3 ああ、看護婦さん。

老人2 このお嬢ちゃんを笑わせとったんですわ。

老人3 寸劇ですよ。寸劇。

看護婦 寸劇？

老人1 「江戸城松の廊下、武蔵対信玄、秘剣ツバメ返し」

看護婦 ほかの患者さんもいるんですからね！静かにやって下さい。

老人2 …静かになあ。

老人1 こりや院長命令でやってるんですから。

老人3 そうじゃ、文句があるなら院長先生を呼んで下さいよ。

看護婦 院長は…今準備中で…。

老人1 何じゃ、朝の問診にも来んと患者をほつぱり出して。

老人2 わしらは肺病病みだぞ！

看護婦 誰が肺病病みですつて？もうすっかり元気じゃありませんか。

老人3 そんなことは…。

看護婦、老人3の腹を打つ。

老人3 痛え。

看護婦 結核の患者さんっていうのはね、普通太れないんです。それがおじいちゃん…こんなに太りかえって。

老人1 そんな、まだ咳も出るよ。

老人3 そうそう。

看護婦 嘘つきなさい。検査結果もとくに正常じゃありませんか。…ここに居られるのは院長のご厚意なんですよ。それを…毎日毎日、変なイタズラばかりして。

老人1 じゃから、これは院長命令で…。

老人2 そうじゃよ、このお嬢ちゃんを笑わせるのはわしらの仕事なんじゃ。

老人3 文句があるなら院長を呼べ！

老人1 そうじゃ、そうじゃ！

すると、上手より院長が登場。老人たち、気がつかない。院長、大石内蔵助の扮装に二丁拳銃、胸には聴診器という出で立ちである。

看護婦 あ、院長先生。

院長 おはようございます！

老人達 い、院長先生！

院長 朝の問診を行います！

老人3 い…院長、ちょうど良いところに…。

老人1 このわからん看護婦さんに説明を…。

院長、少女の目の前に行く。そして、少女の目の前で変なポーズをとる。少女、関心を示さない。

老人2 …院長？

院長 やつぱり…ダメだ。

老人2 ？

院長 ピクリとも笑わない…ウハハハハ…看護婦さん、鞭。
看護婦 はい。

看護婦、院長に鞭を渡す。

院長 最近乗馬を始めましてね…。どうです？二丁拳銃。イカしてるでしょ？サムライガン

マンです！

老人達 カッコ悪う。

院長 ほら、これなんてかなりの業物ですよ。

院長、腰にさした日本刀を抜く。慌てる老人達。

老人3 いや、そんなことはどうでもいいんですよ、院長。

院長 はい。

老人2 院長、確かに我々に命令しましたよね？

老人1 このお嬢ちゃんを、笑わせるようにつて。

看護婦 本当ですか？

院長 …ええ、確かに。

老人3 それ見ろ！

老人1 わあい、鬼の首とったぞお。

老人2 ねえ、どれ？鬼つてどれ？

老人1 これ…。(ステッキで看護婦を示す)

看護婦 …。

院長 笑わせてくれれば、入院を延長すると約束しました。

看護婦 健康な患者の入院を延長するんですか？

院長 彼女はね…今に大金持ちになるんですよ。(小声で)

看護婦 大金持ち？

院長 ええ、彼女はさる大富豪の令嬢でね。…かつ、たった一人の遺産相続人です。

老人1 うむ…黙っていても大金持ちじゃ。

老人2 恵まれたやつもいたもんだわい。

院長 ところが！…あるうことか…彼女は感情を失っていたのです。

看護婦 感情を…？

院長 彼女はしゃべらない、泣かない、笑わない、怒らない…。数少ない親族の前でも、召使

の前でも…感情らしい感情を見せることなどはほとんど無かったそうです。…彼女の

親族は、彼女を忌み嫌い、「魔物」とまで呼んでいたんですよ。

看護婦 魔物…。

院長… 彼女の親族たちは…彼女が死ねばいいと思っっているのです。結核にでもかかって。…だ

から、金づくで…この娘をこんなところに押し込んだんです。

老人2 金づくじゃと！？もうけとるのか？

院長 ええ、お陰でかなり潤いましたよ。あなた方の入院費も、ここから捻出してらるんですからね。

看護婦 なんですつて！

看護婦以外 え？

看護婦 このゴク潰しどもの入院費をウチが持つてるんですか！？

老人3 ゴク潰しつて…。

院長 それなりの仕事には、それなりの報酬を払わなくちゃ。

看護婦 このゴク潰しおじいちゃんたちが、一体何の仕事をしてらるつて言うんです？

院長、少女を指し示す。少女、楽しそうに微笑んでいる。

院長 ゴク潰し…言つて。

看護婦 え？…ご、ゴク潰し。

院長 そうそう、おじいちゃん達に向かつて。

老人達 …。

看護婦 …ゴク潰し！

少女、笑う。

老人達 ウケた！（老人達、ハイタッチ）

院長 分かったでしよう。

看護婦 な…何が？

院長 彼女を笑わせることが出来るのは…このおじいちゃん達だけなのです。いや、正確に言うならば…おじいちゃん達に関するこののみ、この少女は、笑う！

老人3 …でもまあ、最近目が肥えてきたらしくてね。

老人1 ちよつとしたことじゃ笑わなくなってきたよな。

老人2 芝居仕立てとかウケるね。最近。

院長 ね、彼女に感情を取り戻せるのは、この三人だけです。

看護婦 待つて下さい！じゃあ、このゴク潰しおじいちゃんたちのショートコントの為に、当療養

所はお金を払っているんですか！

院長

(小声で)彼女がね…この感情的にまっさらな状態のうちに…手なずけてしまおうんですよ。…上手くすれば…。

老人3

転がり込んでくる遺産の遣い道は…。

老人2

わしらの思いのままじゃ！

院長と老人達、不気味な笑い声を立てる。

看護婦 不潔だわ！

老人3 は？

看護婦 不潔だわ！

老人2 あ、はあ。

看護婦

私は…私のお兄さんの多重人格を治してあげたい一心で看護婦になったの！クリー

ンな職場でクリーンな患者さんに囲まれながら、スピリチュアルな福祉ライフが送れる
と思ったの！なのに何さ！職場の上司は金みずくのドロドロじゃない！何よこのエコノミ
ックアニマルプラネットは！

金？金？金が何なのよ！もう、超ダークサイド！超スピリチュアルなイノセントライフを送りたいのに！ノーフューチャーじゃない！超超ハイブリットノーフューチャーUKじゃない！（ファックキューのポーズ）この悪魔！クリーンな医療業界を汚す白衣の堕天子！

老人1 なんかカッコイイね。

看護婦 辞めてやる！こんな職場辞めてやる！辞めて内部告発してやるわ！あっちこっちのマスコミに賄賂だの医療ミスだの垂れこんで、こんなアニマル病院、営業停止にしてやるんだわ！覚えてらっしゃい！ひやははははは！

看護婦、「ノーフューチャー！」と叫びながら上手袖に走り出す。

老人2 あ！

老人1 逃げるぞ！

老人2 いかん！わしらの遺産横取り計画を台無しにされてたまるか！

老人1 へ、金が入ったら、わしは鎌倉に別荘をかうんじゃ。

老人2 わしなんか尾道の古民家を移築して居酒屋を開くぞ。

老人1 否！香港にブティックを開くのじゃ！

老人1・2 ブティックを開こう！

老人1・2、不気味に笑う。

老人1 追うぞ！

老人2 おう！

老人1・2、看護婦を追って上手袖に消える。

院長 やれやれ。(具足を外し始める)

老人3 追わんでいいのか。

院長 大丈夫ですよ。どうせ彼女の帰つて来るところはここしかありません。

老人3 そうなのか。

院長 彼女は…少し精神を病んでいましてね。

老人3 そうみたいじゃな。

院長 この病院に来た時には、手首が切り傷でいっぱいでした。

老人3 よく採用したな。

院長 採用してませんよ。

老人3 え？

院長 彼女の3番目の人格が、自分を看護婦だと思い込んでいるんです。

老人3 はあ？

院長 結核は4番目の人格ね。彼女がここに入院を希望したんですよ。

老人3 じゃあ、あの看護婦は患者だったのか？

院長 そう。ちなみに多重人格の兄は彼女の2番目の人格です。

沈黙。

老人3 多重人格の中に多重人格がいるのか。

院長 そうです。

老人3 この人格は結核だけど、この人格は結核じゃないなんて可能なのか？

院長 可能です。

老人3 …ほんとかな。

院長、穏やかに笑う。

老人3 あんた嘘つきだからな。

院長 あなただだって嘘つきじゃないですか。

老人3 え？

院長 小説家先生。

老人3 ああ…まあ。

院長 自分たちと同じ病気だと思っていた仲間がね…実は自分たちの病気をネタにして小説を書いているだけ…なんて知ったら…これは…。

老人3 あの二人を騙していることについては…悪いと思っておるよ。

院長 しかし、あなたも物好きだ。健康な身で…自分から…結核患者の只中に入ってくるんですから。

老人3 仕事熱心だと言ってもらいたい。

院長 まあ、こちらとしてはお金を頂いているので…いつまで居て頂いてもいいんですがね。

老人3 いや…先生、この頃はまた…とびきりの素材を連れて来てくれたじゃないかね。

院長 とびきり？

老人3 あの感情を失くした…女の子じゃ。

院長 ああ…ええ。

老人3 肺結核を患い、死の影に迫られながらも…健気に少女の世話を続ける青年。…閉

ざされた山深い療養所での濃密な日々。

院長 嘘ばかりですねえ。

老人3 いいのじゃ。面白ければいいのじゃ。

院長 青年というのは私ですね。

老人3 わしじゃ。

院長 …。

老人3 わしの青春時代の思い出として執筆しようかと思う。どうだね？

院長 いいですねえ。

少女、くすくす笑う。

老人3 よおし、創作意欲がわいてきたわい！はっはははは。

院長と老人3、上手に退場。入れ替わって、下手から看護婦がものすごい勢いで駆けて来る。それを追いかけて、老人1・2も登場。

老人1 さあ、追い詰めたぞ！

老人2 手を焼かせてくれたわい。

看護婦 ノーフューチャー！

この時、老人2が周囲の状況に気がつく。

老人2 まて、ここは…。

老人2、少女を発見。少女、笑う。

老人2 お嬢ちゃん！

老人1 巡り巡って同じ部屋に戻ってきたようじゃな…。

老人2 おい、なんか知らんがお嬢ちゃんウケとるぞ。

老人1 ふん…わしも可笑しくてたまらんわ。

老人2 何？

老人1 この看護婦さんを取り押さえることによつて、わしらの遺産横取りリッチ計画ははますます現実に近づいていくのじゃからな！

老人2 お前…声がかいぞ。お嬢ちゃんの前で。

老人1 気にするな。どうせこの娘は泣くことも喋ることもできんのじゃ。

老人2 しかし…。

老人1 お嬢ちゃんの興味あるものはな…この漫画(少女の読んでいる)と…わしらの提供する…ハイセンスギャグだけじゃ。

老人2 …うむ。

老人1 …お嬢ちゃんは遺産などに…興味はない。な。

少女、笑う。

老人1 ほら、笑った。

老人2 …むう。

看護婦、老人たちが少女に集中した一瞬の隙を狙って逃げ出そうとする。そこを老人二人、間髪を容れずステッキで抑える。

老人2 …おっと…逃がしてたまるか。

老人1 …お前さんはこの療養所から永久に逃げられんのじゃ。

看護婦 …。

老人1 …さあ…どこの部屋に軟禁しようかのう。

老人2 軟禁するだけでは面白くないから、時期にわたしの個人的なオモチャとして使ってや

ろう…。

老人二人、本当に不気味に笑う。と、看護婦咳き込んでうづくまる。

老人1 な、何じゃ？

老人2 同情してもらおうたって無駄じゃぞ。

看護婦 …私はナポレオン。

老人2 え？

看護婦 この女の4番目の人格、肺結核のナポレオンです。

老人1 なに！

看護婦 …ナポレオンです。(咳き込む)

老人2 多重人格のひとつがナポレオンなのか！

老人1 かなりメジャーな人じゃない。

老人2 うむ。

老人1 ほ、本物じゃろうの。

老人2 …我輩の辞書に。

看護婦 不可能はない。

老人1・2 本物じゃ！

看護婦 ナポレオンに意地悪するとただでは済まんぞ。

老人1 …どうする？

老人2 相手はナポレオンじゃ。迂闊には逆らえんわい。

看護婦 ナポレオンのワンポイントアドバイス。

老人1・2 え！

看護婦 お前(老人1)は長男だな。

老人1 え…はい。

看護婦 最近、実家に帰ってないだろう。

老人1 ああ…ええ、まあ。

看護婦 死ぬぞ。

老人1 本当か！

少女、笑う。

看護婦 ちゃんと墓参りしなさい。

老人1 あ、はい。

看護婦 あと、トイレに親父の小言を貼るのはやめなさい。

老人1 何で知ってるんじゃ！

看護婦 ナポレオンだからな。不可能はない。

老人1 多重人格恐るべし！

老人2 はい！はい！

看護婦 うん？

老人2 不可能はないナポレオンさんに質問です。

看護婦 うむ。

老人2 若い娘というのはどんなことをしたら喜ぶのかのう？

老人1 何じゃそれは？

老人2 最近、お嬢ちゃん…なかなか笑わんと思わんか？

老人1 ああ、そういえば…。

老人2 前はもう、箸が転がつても笑うみたいな感じじゃったが…。

老人1 ああ…入れ食いじゃったね。

老人2 やつぱりちよつと飽きてきたのかな…と。

老人1 ああ。

老人2 ここでひとつナポレオンの意見でも聞いてみようかな…と。

老人1 ああ、なるほどな。

看護婦 で、質問は？

老人2 はい、ナポレオンにお尋ねします。若い女性を笑わせるにはどうしたら良いのでしょうか？

看護婦 そうか…では、目を閉じなさい。

老人達、目をつぶる。

看護婦 よいぞ…そして、二人高らかにこう唱えるのじゃ。「王様の耳は…」

老人1 王様の耳は！

看護婦 レモンの味！

老人2 レモンの味！

看護婦 続けるべし！

老人1と2、目を閉じて「王様の耳はレモンの味」を繰り返す。看護婦、そのスキに逃げ出す。少女、笑う。そこに、院長と老人3が帰ってくる。老人3、老人1と2を止める。

老人3 何をやっておるんじや。

老人1 ナポレオンの大予言じゃ。

老人2 ありがたいお言葉なんじゃよ。

老人3 看護婦さんはどうした？

老人1・2 …。

老人3 捕まえたのか？

老人1・2 そうじゃった！

老人1 どこじゃ…どこへ行った。

老人2 おのれ…うまく逃げ出しおったな。

老人1 よし、探すぞ！

老人2 おう！

老人1と2、上手に出て行くこうとする。

院長 お待ちなさい！

老人2 何じゃ！

院長 彼女は…看護婦さんはね…ここから出て行くことは不可能なんですよ。

老人1 なぜじゃ！何の根拠があつてそんなことを言うのじゃ。

老人2 そうじゃ、内部告発でわしらの遺産分捕り計画が失敗したらどうする気じゃ！

老人3 その心配はない。

老人1・2 何？

老人3 あそこまで精神を病んだ者を信用する人間など、そうはおらんよ。

老人1 …しかし。

老人3 前にも何度かこういうことがあつたんじゃよな、院長。

院長 あ…ええ。

老人3 そのたびにあの看護婦はここに連れ戻されておるんじゃ。じゃから、あの看護婦はこの場所から逃げられないし、あの看護婦の言うことを信用する人間など…誰もおらん。…じゃよな、院長。

院長 …ええ。

老人1 そういうことか。

老人3 それよりも、このお嬢ちゃんの気持ちを掴むほうが、わしらにとってずっと大事じゃないかね。

老人2 おお、そうじゃ。そうじゃな。

老人1 お前、いいこと言うのう。

老人3 そこだな、院長、わし、提案したい。

院長 何ですか？

老人3 お嬢ちゃんをひとつでも多く笑わせた者が、遺産をより多くもらえるというのほど
うかね？

老人1 何！？

老人3 考えてみれば当然じゃろ？

老人2 しかし、それではわしらの友情にヒビが…。

老人3 そんなこと言っておるから最近お嬢ちゃんが笑わなくなってきたおるのじゃ！

老人1 …。

老人3 このままではお嬢ちゃんの心を掴むことなど、到底覚つかんわい！

老人2 …うーん。

老人3 …それにな。

老人1 うん？

老人3 考えてもみろ…勝ったもんには更に巨額の遺産が転がり込んでくるんじゃぞ。

院長 …。

老人2 う、うむ。

老人3 おいしいぞお。鎌倉に別荘とか、居酒屋経営とか…小さなことを言っている場合じゃなからう。

老人1 ブ、ブティックを二店舗展開することも可能かろう？

老人3 小さい小さい！都内に総合ファッションビルを建てたらよいのじゃ！

老人1・2 総合ファッションビル！

老人3 そうじゃ！総合ファッションビルじゃ！

老人1 わ…わしやる。

老人2 わしもやる。

老人3 よし、話は決まったな。

老人1 そうと決まれば早速ネタ探しだわい。

老人2 そうじゃ…何か良いアイデアはないものか…。

そこに、下手からナポレオンの帽子をかぶった看護婦が通りかかる。

老人1 あ、ナポレオン！

老人2 さつきみたいに笑いの奥義を伝授してくれんか。

看護婦、老人たちを見て不敵に微笑む。そして、唐突に上手袖に消える。

老人1 あ、待ってくれ！

老人2 ナポレオン！

老人3 …。

老人1と2、共に舞台上手に消える。老人3と院長、そして少女が舞台に残される。

院長 …煽あおりますね。

老人3 …何が？

院長 ああやってあの二人に競争させて…。

老人3 ああ、ははは。

院長 そんなにお金が欲しいんですか？

老人3 いや、はは…金は…いやいや…。

院長 文学ですか？

老人3 うん？…まあ、そうかな。

院長 …。

老人3 ジジイが二人、仲良くしておっても何のプラスにもならんのじゃ。わしの小説には。

院長 …ふむ。

老人3 それよりも、波乱じゃね。コンフリクトじゃね。人間相互の争いが起こるようじゃなければ、こりや嘘じゃよ。

院長 まあ、結構ですが…大概にしておいて下さいよ。

老人3 うん？

院長 あの二人は健康だといえ病み上がりです。精神の負担は、肉体の負担以上に人間を消耗させ…。

老人3 分かっておるよ。分かっておるとも…じゃがね。

院長 はい。

老人3 わしの中に、一つの情熱が生まれたことを…院長、あんたに告白しておきたい。

院長 情熱？

老人3 ああ…このところ…わしは…もう、この娘の笑いを…見たくて…見たくて…見たくて
たまらんのじゃ。

院長 …ほう。

老人3 老いらくの恋か…疑ってみた。違う。少女愛好か？否、断じて違う。

院長 …。

老人3 そう、それはただただこの娘の笑いを見たいと願う…純粹化された。欲じゃ。

院長 …欲。

老人3 そうじゃ、欲じゃ！

院長 その欲の為なら、あの二人を利用することも…厭いとわないわけだ。

老人3 厭わん。

院長 悪い人だ、あなたは。

老人3 じゃが、正直じゃないか。あんたと違って。

院長 いやいや、嘘つきでしょう。

老人3 確かに、わしが有名な小説家だということは、あの二人には内緒じゃ…。

院長 看護婦さんのことですよ。

老人3 …ああ。

院長 彼女がここから逃げ出したことなんて、一度もないんですからね。

老人3 あれは…ああでも言わないとあの二人がおさまらんかったから…。

院長 いえ、あなたは確信していた。…彼女が、ここから逃げられないことを。

老人3 …。

院長 何故です？

老人3 何となく分かったんじや。あの看護婦も…ずっと、ここに居たがっている。…何故かわ

かった。

院長 …。

老人3 あとは、あんたの言葉を信じたのかな。…あはははははは。

少女、笑う。院長と老人3、一瞬目を見合わせる。老人3、これを見てさらに愉快そうに笑う。笑いながら舞台下手へと去る。院長、老人3のあとをついて行く。

院長が完全に捌けると同時に、上手袖から看護婦が飛び出して来る。後ろから老人1と2が追い縫ってくる。

老人1 さあ、追い詰めたぞ！

老人2 手を焼かせてくれたわい。

看護婦 ナポレオン、見参！

この時、老人2が周囲の状況に気がつく。

老人2 まて、ここは…。

老人2、少女を発見。少女、笑う。

老人2 お嬢ちゃん！

老人1 巡り巡って、またもや同じ部屋に戻ってきたようじゃな…。

老人2 おお…またまたお嬢ちゃんが笑うておる。

老人1 いいのう…実にすばらしい音色じゃね。(耳もとに手をやる)

老人2 癖になる笑いじゃ。

老人1 なあ、ナポレオンよ…ひよつとしたらわしら…。

老人2 ?

老人1 いいコンビなんじゃないか？

老人2 何！？

老人1 見よ…このナポレオンと追いかけてこをすることによって…お嬢ちゃんはこんなにも笑っている。

老人2 ああ、まあ。

老人1 お前(ナポレオン)に笑いのコツを教えろだのネタを伝授しろだのヤボなことはもう言わん。…じゃから大人しくわしとコンビを組みなさい。そして、お嬢ちゃんを爆笑の渦に巻き込むのじゃ。…ふふ、わしとお前で莫大な遺産を山分けしようではないか。

老人2 貴様！ 抜け駆けする気か。

老人1 抜け駆けとは人聞きの悪い。努力じゃよ。

老人2 なら…なら、わしの方が相性もいいかもしれないぞ、ナポレオン。

老人1 なに！

老人2 お前なら、わしの経営するファッションビルの共同経営者にしてやっても良い。

老人1 むう…！

老人2 第二の渋谷109を目指そうではないか。

老人1　じゃあ、わしはお前のオリジナルブランドを作ってる！ブランド名はサマンサ・ナポレオン・タバサでどうじゃ！女性向け高級衣料及びアクセサリーを中心に…。

ここで、看護婦が苦しみ始める。取り乱す老人達。

看護婦　おじいちゃん…あたし。

老人2　か…看護婦さん。

老人1　元の人格に戻ったのか。

看護婦　そう…私また…。

老人1　気に病むことはない。

老人2　そうじゃ、あんたの才能は素晴らしい。

看護婦　才能？

老人1　そうじゃ、ある時はナポレオン、ある時は看護婦。

老人2　そして、お嬢ちゃん好みの独特のギャグセンス。

看護婦　…ギャグセンス？

老人1　そうじゃ！

老人2 わしらと一緒に笑いの頂点を目指そう！

看護婦 何言ってるのあんたたちは！

老人1・2 ひい！

看護婦、鞭を振り乱しながら、老人1・2を追いかける。少女、笑う。

老人1・2 わ、笑った！

看護婦 さつきはよくも追いかけてまわしてくれたわね！

老人1・2 ノーフューチャー！

老人1・2と看護婦、退場。入れ替わって老人3と院長が登場。老人3、少女の前に立って頻しきりに変な動きをする。少女、下を向いたまま無反応。院長は腕組みをしてそれを見ている。

老人3 …ダメじゃ。

院長 無理ですよ。止めましよう。

老人3 なになにに、まだまだ。

院長 もう一時間もそうしているじゃありませんか。

老人3 …はは…もうすぐじゃ…もうすぐ笑う…。

老人3、膝を着く。院長、驚いて駆け寄る。

院長 大丈夫ですか。

老人3 おかしいのう…なぜ、笑わんのか。

院長 欲じゃないですか？

老人3 欲？

院長 自然体でやればいいんですよ。

老人3 ああ…力んでおったかな。

院長 必死なピエロは哀れにさえ映るものです。

老人3 欲さざれば与えられる。

院長 欲すれば逃げていく。

老人3 残酷なものじゃ。

院長 …。

老人3 仕方ない…あの二人と看護婦さんが戻ってくるのを待つしかあるまいて。

院長、少女の前に立つ。

老人3 な…何じゃ？

院長、変なおどりを踊る。無反応の少女。院長、咳き込みながら崩れ落ちる。

老人3 院長！

院長 …やはりダメだ。

老人3 一体…一体どうしたのじゃ!?

院長 昔は…これでよく笑ってくれたのになあ…。(咳き込む)

老人3 昔？

院長 このお嬢さんはね…金持の娘でも何でもありません。

老人3 え！

院長 私が引き取ったんです。孤児院から…本当に善意のつもりでした。しかし…実に不思議な娘でね。…彼女は、周囲の人間をその笑顔の虜にしながら…同時に不幸をふり撒

いてゆく。
ま

老人3 不幸…。

院長 あの看護婦さんも犠牲者の一人です。私も彼女も…このお嬢さんの笑いに侵されて

…この療養所から抜け出すことが出来なくなりました。

老人3 療養所から…抜け出すことが…？そりやどいう事じゃ？

院長 はは…あなた…ここにいつから入院していたか…覚えていますか？

老人3 いつから？…えー…。

院長、薄く笑みを浮かべる。

老人3 えー…、ちよつと待ってくれ。いつから…？

院長 どうですか？

老人3 わし…いつから入院してたっけ？

その時、上手から老人1と2が突入してくる。引き続き看護婦が登場。

看護婦 さあ、追い詰めたわよ。

老人1・2 ひいひい！

この時、老人2が周囲の状況に気がつく。

老人2 まて、ここは…。

老人2、少女を発見。少女、笑う。

老人2 お嬢ちゃん！

老人1 巡り巡って、またお馴染みの部屋に戻ってきたようじゃな…。

老人2 おい、なんかお嬢ちゃんウケとるぞ。

老人1 当然じゃ。このジジイども三人が勢ぞろいした上に、ここには看護婦さんすらおるのじゃからのう。

老人2 うむ。

老人1 まさにお笑いドリームチームじゃ！さあ、出でよナポレオン！さすれば史上最強の布陣を以ってお嬢ちゃんの笑いを引き出すことができるぞ！

老人2 しかしお前、そう都合よく…。

看護婦、突然苦しみだす。「吾輩は…吾輩は…」

老人1・2 キター！

看護婦 ナポレオンです。

老人1 よくぞ我が呼びかけに応えた！ナポレオン！

看護婦 呼んだ？

老人1 呼んだ！

老人2 お前…いいナポレオンじゃ。

老人1 早速じゃが、このお嬢ちゃんをわしらと共に笑わせて欲しいのじゃ！

老人2 笑わせて欲しい！

看護婦 いいけどお、タダつてわけにわあ…。

老人2 心配するな！わしらには莫大な遺産が入る予定なのじゃ！

看護婦 うーん。

看護婦 私い、お金つて興味なくてえ…仮にもナポレオンだし。

老人1 では何が欲しい！欲しいものをくれてやる！

看護婦 いきなりそんなこと言われてもお。

老人1 じゃあ、遺産をそっくりくれてやる。

老人2 なに！

老人1 不満か？

老人2 馬鹿なことを言うんじゃない！お前、何のためにお嬢ちゃんを笑わせるのじゃ！

老人1 わし、もう金なんぞどうだっていいんじゃない。

老人2 え！

老人1 わしは、お嬢ちゃんの笑いが…とにかく笑いが！見ただけなんじゃ。た、た、魂でも

くれてやるぞ！

老人2 魂？

看護婦 じゃあ、それで。

老人1 よし！話は決まった。

老人2 待て…ホントに遺産は…。

老人1、看護婦、少女に向きなおる。

老人1 さあ、喰らうがいい！わしらナポレオンの繰り出す渾身のギャグ！王様の耳は…！

この時、院長が少女の前に立ちふさがる。そして、さっきの変な踊りを踊る。言葉を失う老人1と看護婦。少女、笑う。倒れ込む院長。

老人3 院長！

院長 はは…やつと笑ってくれた。

老人3 どうした…一体どうしたんじゃ！？

院長 みんなこうして死んでいきました。彼女を笑わせようとするものは…疲れ果て、気が

狂って…死ぬ。

老人3人　　え！？

院長　　私はどうやら…正気のまま…^い逝くことが出来そうです。ありがたい…。

院長　　看護婦さん…。

看護婦　はい。(正気に戻っている)

院長　　先に…^い逝きます。

看護婦　さようなら。

院長　　さよなら。

院長、息絶える。

老人3　院長！

老人1　ど…どういうことじゃ。

老人2　展開が早過ぎてついていけん。

老人3 院長―！（絶叫）

看護婦、院長を引き摺って袖に入る。おもむろに立ち上がる老人達。

老人3 と、いうわけじゃ。

老人2 お嬢ちゃんを笑わせようとしたものは不幸になる？

老人1 馬鹿な。わしはお嬢ちゃんが笑うたびに、こんなにもハッピーじゃぞ。

老人3 わしだつて同じじゃ。しかしな…お前達、自分がいつからここに入院しておったか…覚えておるか？

老人2 何じゃ、突然に。

老人3 いいから、思いだせ。

老人1 そんなの…えー。

老人2 …。

老人1 えーつとなあ。

老人2 あれは夏だったか…冬だったか。

老人達 …。

老人1・2 覚えとらん。

老人3 な…、お嬢ちゃんの笑いに憑かれた者は、この療養所から抜け出ることが出来なくなる。そして、ひたすらお嬢ちゃんを笑わせることに没頭し…過去すら忘れてしまう。

老人1 馬鹿な…。

老人2 じゃあ、莫大な遺産は！？

老人3 阿呆。そんなの、あの院長の大ボラに決まっておろうが。

老人2 ……そんな。

老人3 それどころか…お嬢ちゃんの笑いに精神を蝕まれた者は…気が触れて…消耗し、最後には死んでしまう。

老人1 ……。

老人2 じゃあ、じゃあ…こんな所いても意味ない。遺産もらえないと意味ない。

老人3 意味ないとかじゃなくて…帰れんの。

老人2 いやだ！いやだ！遺産もらえないの嫌だ！意味ない！

老人3 ……じゃから。

老人2 わし、帰る！

老人3 あ。

老人2、下手袖に向かつて駆け出して行く。老人2、舞台裏を通って、上手袖から出てくる。
(足音が客にばれてもよい。いや、むしろ、バレよ。急げ。)老人2、南洋のお面を着けている。

老人2 …。

老人1・3 …。

老人2、老人達の列に加わる。

老人3 と、このように戻って来てしまうのじゃ。

老人1 うむ。

老人3 と、このように気が触れてしまうのじゃ！

老人1 うむ！

老人3 帰れんのじゃ！

老人1 うむ！！

と、ここで看護婦が登場。

看護婦 おじいちゃん…おじいちゃん…あ。(老人2を見つける)

老人2 …。

老人3 院長先生はどうした。

看護婦 捨てました。

老人3 よし。

看護婦 でもいいの？役所とかに届けなくて。

老人3 いいの。表に出ようとしたり、外と連絡を取ろうとしたり…一切無駄じゃ。

看護婦 はあ。

老人1 しかし…どうする。このままじつとここに居るつもりか。

老人3 うーむ。

ここで、老人2が周囲の老人達をかき分けて少女の前に座禅を組む。

老人3 な、何じゃ？

看護婦 分かったわ。

老人3 は？

看護婦 おじいちゃんは禅の境地に入ることによって、笑いへの執着から解き放たれようとして

いるのよ。

老人1 そうなのか？

ここで少女、老人2を見て笑い始める。耳をふさぐ老人1と3。咳き込み、苦しみ始める看護婦。

老人3 ぐはあ…なんと心地よい音色じゃ。

老人1 耳がとろけそうじゃ。

老人3 やめろ…やめろ。

と、突然老人2が立ち上がる。走って部屋から出て行く。

老人3 ど…どこへ行くんじや！

老人1 はあ…もつとじや…もつと笑つてくれえ…。

老人3 おのれ…自分が真つ先に逃げ出しおったわ。

看護婦 わ…私はナポレオン。(少女の笑い、一層大きくなる。)

老人1 ぐああ、出てくるな、ナポレオン。

老人3 お前はお嬢ちゃんの笑いのツボなんじや…今出られては…ああ…やめろ…。

と、老人2がバッグを片手に戻ってくる。少女、一瞬にして笑いやむ。

老人3 と…止まった。

老人1 お前…戻ってきたのか。

力強く頷く老人2。そして、老人3にバッグを手渡す。

老人3 ……これは。

老人1 ……セシルマクビーじや。…セシルマクビーの限定小物じや！

老人3 お前…これをどこで…。

老人1 …表に出られたんじゃない！

老人2、力強く頷く。目を輝かせる老人1と3。

老人3 座禅じゃ！座禅が有効なんじゃ！

老人1 でかしたぞ！

照れる老人2。

老人3 ナポレオン、手伝ってくれ。

老人3、袖から警策(いわゆる禅における、あの棒)を出す。看護婦、受け取って頷く。座禅の態勢をとる老人達。看護婦、老人達の背後をフラフラと巡回する。看護婦、老人2ばかりを殴る。そのたびに老人2、合掌一礼。

老人3 心を無にするのじゃ。

老人1 うむ。

老人3 宇宙は在るようであり、無いようでも無い。

老人1 うむ。

老人3 お嬢ちゃんは存在するようでも存在せず。その笑い声は…秋の夜の鈴虫の音ねに同じ。

老人1 …。

老人3 一切の執着しゅうちやくを捨てよ。

老人1 …。

老人3 見えるか？

老人1 …あと少し。

老人3 見えたか？

老人1 …む…む。

と、突然に老人1。

老人1 見えたあ！

と、叫んで舞台下手から走り去る。そしてお面をつけて上手より戻って来る。

老人3 馬鹿め…まだ早いわ。

老人1 …。

老人1、また座る。

老人3 心を無に保つのじゃ…。

老人1・2 …。

老人3 何事があるうと心を動かしてはならん…。

老人1・2 …。

すると、上手袖から銅鑼の音が聞こえる。

老人3 な…何じゃ？

上手袖から南洋のお面を着けた男が登場(院長)。男は銅鑼を鳴らし続ける。すると、それに合わせて老人1・2、舞う。看護婦、うずくまって苦しみだす。

老人3 お…お前達。やめろ！…何事が起ろうと心乱されてはならんのだ。

少女、笑いだす。それに合わせて看護婦、突然立ち上がる。舞いながら、老人3を鞭打つ。

老人3 ぬはああ、何という笑いじゃ！何という…甘美な！

老人3、必死で経文を唱え始める。少女の笑いと銅鑼、より高らかに鳴り響く。老人、ひと際大きく経文を唱えると、全体の動きが制止する。老人1と2、血を吐いて崩れ落ちる。院長と看護婦も力尽きる。ゆっくりと立ち上がる老人3。

老人3 …。

老人3、少女に向きなおる。少女に向かつて一礼。

老人3 今回も、お疲れ様でした。

少女 …。

老人3 長らくと世話になりました。…あなたのお陰で、一体わしは何者なのか、ここが何処なのか答えが出ました。

少女 …。

老人3 わしも…こいつら(老人1と2)も、先生も…それから看護婦さんも、始めっからここに居た。わしは最初からジジイだったのじゃ。

生まれて、働いて、老いて、肺病を病み、入院したという…曖昧な…実に曖昧な、本当にあつたかどうかとも分からない「今まで」という記憶を持つて…何度も何度も、繰り返しこの療養所に“生まれた”。…このジジイの姿でな。

少女 …。

老人3 いや、実に我々はあんた(少女)の笑いに執着しておるし、あんたもあんたの笑いに執

着しておる。そのためにこの病室はあつて…お嬢ちゃんの笑いを中心にわしらはグルグルと同じところを回っておるのじゃ。世界はこつちの出口(上手を指す)と、こつちの出口(下手を指す)までしかない。…わしらはこの病室以外を知らん。

少女 …。

老人3 じゃが…それも時期に終いのようじゃ。わし、気がついちゃったもんね。

少女 …。

老人3 おい、お前(老人2)。

老人2、顔を上げる。老人3、限定小物を拾い上げる。

老人3 お前な、少しばかりこの療養所の外に出たと勘違いした様じゃが…実は一步もこの病室の外には出ておらん。

老人2 …。

老人3 お前は…この病室に戻るための口実を、実に曖昧なセシルマクビーと、実に曖昧な限定ノベルティーを…考え出したにすぎん。…また、この病室に「生まれて」しまったの

じゃ。…このお嬢ちゃんの笑いに曳ひかれて。

老人2
…。

老人3 まだ、ここにいるのか？

老人2、頷く。

老人3 ご苦労なことじゃ。

老人2、“ガクツ”と力尽きる。

老人3 さて、じゃあ、わしそろそろ行くよ。

少女
…。

老人3 お嬢ちゃん、あんた(少女)の笑いは…ただの笑いじゃ。…あははははははははは！

老人3、上手から舞台の外に出て行こうとする。すると院長、突然立ち上がり、老人3を隠

していた短刀で刺す。

老人3 …な。

院長の顔からお面がはがれる。

院長 …あなただけリタイヤしようなんて…そうはいきませんよ。

崩れ落ちる老人3。

老人3 あんた…死んだんじゃないのか？

院長・看護婦 うっそでーす。

老人3 何い。

院長 お嬢さんの笑いを引き出さんがため…ひと芝居打たせて頂きました。いやいや、おじ
いちゃん達、なかなかの名演技。(拍手)

老人3 …哀れな。

院長 ん？

老人3 同じことの繰り返しじゃぞ。

院長 ええ、確かに：我々はお嬢さんの笑いを中心に同じところをグルグルと回る：回遊

魚さながらの存在です。私は一体いつからここに居るのか：そして何万回あなたを殺したのか。：覚えてる？

看護婦 覚えてない…。

老人3 …。

院長 ですよねえ…このいつ果てるともない無間地獄、笑いの地獄…しかしながら、実に居心地がいい。いや…ひよつとしたらこの地獄自体からして、私とあなた(老人3)の空想なのかもしれません。この閉ざされた療養所に飽き飽きした、医者と患者の想像の産物かもしれないのです。

院長、少女に向きなおる。

院長 あなた(少女)はいない！私の空想だ。

少女 …。

院長 あなたはただの結核病の患者だ！私の患者だ！あなたはただの金持ちの娘だ！あなたは私の拾ってきた孤児だ！

看護婦、院長が問いかけるたびに「そうです…」と答える。

院長 …いや、あなたは結核病の患者ではない！金持ちの娘でもない！私の拾ってきた孤児でもない！私の空想でもない！

看護婦 そうです…。

院長 じゃあ誰だ？あんたは誰だ？いつからそこに座っている？いつからそこで笑っている？

少女 …。

院長 …そこに座っている！そこで笑っていればいい。なぜ我々を掻き乱すのか？なぜ我々

をなぶ蹴なぶって楽しむのか？

少女 …。

院長 …なぜ黙っている！なぜ言い訳の一つもしない！畜生め！

少女 …。

院長、崩れ落ちる。

院長 頼む…笑ってくれえ。笑ええ…。

少女 …。

院長、唐突に視線を持ち上げる。少女を睨む。

院長 あんたは誰だ？

看護婦 ただ、居るだけです。

院長、看護婦を睨む。暗転。全員、起き上がって少女を取り囲むように立つ。少女を除く全員、哄笑。照明 C. 1.

院長 次は、もっとおもしろい話がいいね。

少女、ニッコリと笑って頷く。出演者全員、観客に向き直る。一礼。

完